合気道親和館

奥義は初伝にあり

合気道親和館館長　井上強一

植芝盛平を開祖とし、世界中に普及した合気道。なかでも植芝の高弟であった塩田剛三が伝えた技は実戦的と言われ、警視庁において女性警察官や機動隊らに教授されている。柔道、空手道とともに日本を代表する武道でありながら、試合を行なわないため伝わりにくい合気道の真の姿を、塩田剛三の高弟として警視庁で指導し、養神館館長も務めた武道家井上強一氏に聞いた。

基本技を稽古することが重要です

――まず、先生と合気道との出会いを教えて下さい。

「私は外交官になりたくて、英語の学校で勉強していたのですが、そこで養神館に通っている人と知り合いになって、その当時、道場があった新宿区筑土八幡まで行ったんです。そうしたら塩田剛三館長が指導していらしたんですね。面白そうだし、簡単そうだからということで始めたのが昭和30年11月です。私が大学3年のときでした。」

――それまでに合気道に関する知識はありましたか？

「ありました。武道を特集したテレビ番組で、塩田館長が演武をしているのを見たんですが、『うわー、すごいなー、4人も5人もぶん投げているぞ。合気道ってどんなものだろう』と思っていました。入門はそれからしばらく時間は経ちましたが、興味はあったんです」

――塩田先生にお会いしたときの印象はどうでしたか？

「普通の優しいおじさんでした。技をやっているときや、話をされているときは、鋭く厳しい眼をされていましたが、道場生を指導しているときは、すごいなという場面はそんなにないんです。技をこういうふうにやりましょうと説明して、道場の稽古でケガをさせることなどは絶対にありませんでした。厳しい先生であり、優しい先生でした」

――塩田先生の技は、合気道開祖である植芝盛平先生の初期の技を受け継いでいるということですが、晩年の植芝先生と塩田先生の技の違いとはどのようなものですか？

「植芝翁は神がかっていますね。塩田館長は『俺は神様にならなくていいんだ』と仰っていました。力強いと言うと体格は大きくないから適当な表現ではないかもしれませんが、力強さとスピードを併せ持っていましたね」

――一般の人が見ても養神館の合気道は実戦的に見えます。他の合気道と少し雰囲気が違いますが、それは以前の植芝先生にもあったけれど、晩年になって技の風格が変わったということでしょうか？

「そうでしょうね。人間性とともに技が上昇されたということでしょう。だから植芝翁は神がかったという感じです。塩田館長のほうはスパッと切れる技を使いますからね」

――井上先生は塩田先生と長く一緒にいらしたと思いますが、塩田先生の技や風格は年とともに変化しましたか？

「同じですね。神がかってはいないですね。最後のほうは、さほど力強くガーンとやらなくても相手が崩れる、導けるというふうになっていましたから、もしも植芝翁のような神がかったようなところがあったら技も似てきたかもしれないですね。でもそうはならないで、あくまでも実戦的といわれる技を守ってやっていらしたと思います。

塩田館長が我々によく言ったのは、『書道にも楷書と行書、草書がある。俺が植芝先生についてやっていたときは、まさに楷書をやっていた。それが大事だということを骨身にしみて感じているから、お前たちも楷書をしっかり身に付けろ。そのうちに否応無しに行書、草書になっていくから』と。植芝翁は最終的には草書の境地だったんです」

――初心者に草書を見せても読めないのと同じで、合気道の演武で草書の技を見せられても理解しがたいものがあるということですね。やはり習う場合は楷書からということですか？

「それはもう絶対ですね。楷書がしっかり書けなければ、草書を書いても力の流れがだらだらになってしまいますからね。だから植芝翁もただ崩してやっているよ

うでも、崩しきったところで、重心の移動などをやっているのです」
——見てわかりづらいですが、崩しや重心の移動などをしているということですか。
「植芝翁はそれを見せていなかっただけで、塩田館長は植芝翁が40、50代の頃についていますからね。グッと崩されているのを肌身で感じているから、その大事なところをお前たちもやれと、養神館では基本の技をしっかりやるんです」
——植芝先生の晩年の動きを見て真似しても、それは違うものになってしまうと。
「“似て非なり”、という言葉がありますよね。受けの人がついて行けばまるで似たようなことができますが、“似て非なり”ですね。合気道をやっている人たちのなかには、基本を曖昧にしている人たちが多いですね。外国に行って投げようとしたら、相手がついて来てくれなかったとか。ついて来てくれなかったのではなく、崩しきれなかったんですよ」
——塩田先生の教えには、合気道の本質があると。
「私はそう思いますね。実際にいろんな人に会ったり、いろんな話を聞いたりやったりしましたが間違いないと思います。きちっとした基本をやって、楷書から行書を経て草書に至れば、どこで相手を崩しきれば良いのかわかります。崩しきるのにはどこが大事かということを基本技を稽古して覚えましょうというのが、養神館のスタイルですね」

「剣の理合いを体に現す」

——合気道の基になった武術に大東流合気柔術がありますが、「術」と「道」にはやはり違いはあるのでしょうか？
「同じものですよ。合気柔術は「術」を主体に稽古しているということですが、ではその人たちの世界に「道」は無いかというとそうではなく、礼儀作法など日本の武道としての大切な心は教えていますからね。ただ、「道」という文字が付いていないだけで、やっていることは同じです。柔術の先生たちも素晴らしい方たちですよ」
——技術的に言うと大東流合気柔術には何か特色はありますか？
「細かいことで言えば、持った瞬間とか、打った瞬間を大事にした技を稽古していますね。掴んできた瞬間、そこで捉えるということを大東流ではよく使っていて、相手の力、動きを捉えて技に入るということを大事にしている。だからあまり動き回らなくても、畳一枚か二枚ある広さで稽古ができるのでしょう。掴んだ瞬間に投げたり崩したりしますからね。合気道は、それを現代的に掴んできたら捌いて開いて崩してというふうに変わってきただけですから。古式の稽古と現代風の稽古という違いだけですね」
——武器は手の延長だと言われますが、普通の格闘技だと完全な徒手か、剣道のように竹刀を持つかのどちらかに分かれます。でも合気道は徒手と武器の両方を稽古することで、上達し技の理解が深まるそうですが？
「例えば荷物を持つにしても、必ず荷物のほうに気が行って力が伝わらないと持ち上がらないんです。ましてや剣を持って何かをしようと思ったら、剣が別物だと思ったらいうことを聞かないですよ。だから剣の切っ先まで自分の気が行くようにして使わないといけない。「剣の理合いを体に現す」のが合気だと言われていますよね。もともと考えれば体術から始まるわけですから、剣や杖を持ったときも、これは手の延長だと、そのつもりでやれば武器も使えるようになる、という意識付けですね」

合気道の技は打撃七分

——塩田先生は昭和33年頃に打撃有りの試合を考えていたそうですね。
「私が研修生の頃でした。試合をして一般に普及するということを考えてのことです。たしかに柔道も試合をしてあれだけ普及したわけですし、合気道も試合をしてみようということになったんです。研修生同士でやったんですが、腕を極めるのでもお互いに同じレベルの人間だと極まらないし崩れない。それで当身を入れて、機先を制して力が抜けたところで技に入る、というんだけれど試合でやる場合は実際に当てないと力を抜かないんですよ。当てなければ平気な顔している。しょうがないから殴るわけですが、パカーンと殴ると鼻血が出て、それからガッとやると入りかかったところで、グッとこらえる。同じくらいのレベルだと極まらないんです。
それを何回も、何回もいろいろやっていたんですね。そうすると、やっぱりルールを決めないと試合はできない。そうなると合気道ではなくなる。掴んでいろいろやるなら柔道があるし、当身を使うなら空手も寸止めで試合をやっている。合

PROFILE

井上強一

1935年9月10日生まれ、北海道出身。
1955年に合気道養神館に入門し、第一期研修生に。養神館職員を経て1970年に警視庁武道職就任。教養課にて機動隊及び婦人警官に対して実践合気道を指導。
1996年に警視庁名誉師範、合気道養神館本部道場長を務め、2002年には合気道養神館館長に就任。2007年養神館を退職し現在は親和館を設立し合気道の普及に務めている。著書、DVD多数。近著に『合気道「抜き」と「呼吸力」の極意』(東邦出版)がある。
ホームページhttp://shinwakan.jp/

気道はなにをやっても良いということになると試合はできない。ルールを作ったのでは、合気道としての役割がなくなる。これはもう試合はダメだということで、今後一切、試合はやらないということになりました。我々がいろいろ体験してやってみた結果ですね」

――合気道における打撃というのは、どのような位置づけなのでしょうか？

「塩田館長は、合気道において打撃は七分だと言われていました。『これで決まれば、それで良いんだ』と。ようするにタイミングと集中力が決まっていれば、どのような打ち方でも良い、合気道の技は打撃七分であとの技が三分だと。しかし、それをしていると、一般の人は合気道は空手と同じじゃないかということになりますからね。ですから今は三分の技を逆に七分にして稽古をしています。

館長は若いときに中国にいたことがありますが、上海の飲み屋で揉めて、その後にホテルに帰ったら、複数の相手が館長の部屋まで押し入ってきたんです。部屋に入った瞬間に当身で二、三人倒したそうです。それから四方投げで投げたりもしたそうです。一緒にいた友人は柔道をやっていたのですが、投げても相手が何度も起き上がってくるので館長が、『俺がやってやる！』と代わりに倒したそうですよ（笑）。館長もそれまでは実戦での自信はなかったそうです。日本でケンカはやっていたけれど、命のかかった実戦はそれが初めてだった。でもその実戦で合気道のすごさを実感したそうです」

――塩田先生はやはり強かったですか？

「強かったですよ。最初にお会いしたのが塩田館長が39歳のときでしたが、ガンガンやられましたよ（笑）。日比谷公会堂で館長の剣の演武の受けをしたときに、館長が足を滑らしたんですね、後ろにいた私は、隙あり！と攻めたら、館長が振り向かずに避けながら出した剣が、私の脇に入ったんです。そのまま続けて演武したのですが、次の日に気分が悪くなって病院に行って調べてもらったら、医者に肝臓の周りが腫れていると言われました。一番下の肋骨に木刀が当たった傷があったんですが、もし肋骨に当たらずに入っていたら内臓破裂で死んでいたよ、と（笑）。私も咄嗟に防御したので助かったのでしょうが、館長の突きが激しいからそうなったのでしょう。普段は寸止めにしてくれるのですが、そのときは館長も余裕がなくて突いてしまったのでしょう。館長に報告したら『ああ、そうか』で終わりでしたけど（笑）。瞼も4針縫いましたし、歯もやれましたよ」

――演武でケガをされて縫ったのですか？

「所沢の公会堂で演武したときに、木刀が当たって切れたんです。演武の途中で血が垂れてきたので、驚いた周りの人がタオルや薬を持って来てくれたんです。そうしたら、しばらく待っていた館長が、『いつまでやっているんだ。もういいから早く来い！』とそのまま血だらけになって演武したんです。そのあとに今はアメリカにいる串田が短刀を使った演武があって、館長が横面打ちをバーンと受けたら、短刀が串田の手から抜け飛んで舞台のドアにブスッと刺さりました。演武が終わってから、『どうぞみなさん、合気道をやって下さい』と挨拶したんですが、みんな引いちゃって、誰も入門しませんでしたよ（笑）。

今もそうなんですが、合気道らしい技を見てもらおうと思って演武すると、一般の人は『あんな激しいことはできません』と怖がってしまうんです。ですから護身術はもう少しわかりやすくて簡単なことをやろうということになりました（笑）」

みなさんに合気道を稽古してほしい

――先生は海外で指導される機会も多いそうですが、アジアとロシア、ヨーロッパでの合気道に対する認識は同じですか？

「同じです。生活様式や国柄は違いますが、合気道そのものに対する考え方や捉え方は変わらないですね。かえって外国人のほうが真摯というか素直に稽古されますよ」

――今年も海外で指導されるのですか？

「3月にモスクワ、ウラジオストック、カムチャツカ。6月がマレーシア、インドネシア。10月がドイツ、チェコスロバキア、11月にマルタと周る予定です」

――最後に読者の方たちに伝えたいことはありますか。

「みなさんに合気道を稽古してほしいですね。初心者の方だけでなく、他の武道を稽古されている方も、その武道を大切にしつつ、合気道がその人にとって少しでも役に立つものがあれば、勉強してみて下さいということですね」

初期の頃は塩田館長も他の合気道と同じく手を下げた構えだったが、井上氏たち当時の研修生たちの研究もあり、出来た養神館独特の構え。「剣の理合いを体に現す」を実践している。「足の置き方は植芝道場と同じですが、腰（ヘソ）を相手のほうに向けるというところに特徴があります。この構えで中心力が活きて、相手に向かってより集中できます」（井上館長談）

合気道技術誌上講習会

実演／井上強一　　協力／高島三郎

合気道の技術を井上氏に解説していただいた。精妙な技術を持つ合気道だが、基本を繰り返し稽古し、段階を経てはじめて高い次元の技が可能になる。限られた写真や文章では、その身体感覚は伝えきれないが読者の参考にしてほしい。

『片手持側面入身投げにみる技の段階的変化』

『楷書の段階』

相手に手を掴まれ引かれたら、それに合わせて掴まれた手を小指側から円を描くように動かし、相手の腕(肘)を内側に崩す。このとき足も同時に前に進める(①～②)、(※②で相手の力は抜けている状態)。相手の腕を封じながら、側面から入り、そのまま投げる。稽古のときは使わないが、左手で脇腹に当身を打つこともできる(③～④)。この段階では大きな動作で、重心の移動や崩しの基本を学ぶ。

『行書の段階』

稽古を繰り返し上達した次の段階では、手を開き返しながら流れるような一挙動の動作で投げる(⑤～⑦)。

『草書の段階』

技が完全に身に付いたなら、さらに動きを小さく素早くしても技がかかるようになる(⑧～⑩)。すべては基本の延長線上であり、"呼吸力"を使う。("呼吸力"とは、自分の持っている力、意識、気を集大成して出す力)

『抜き』

これらの段階に対して、相手の持っている力を抜いて一瞬で倒す無形の境地が「抜き」である。抜きでは手を開く、腕を円を描くように動かすなど、目に見える動作上の原則は必要無くなる(⑪～⑬)。